

第 46 回 RELC Seminar 参加報告

磯田貴道（広島大学）

2011 年 4 月 18 日から 20 日の 3 日間、シンガポールの SEAMEO RELC にて行われた第 46 回 RELC Seminar へ参加する機会をいただいた。大会テーマは“Teaching languages to different age groups”で、様々な年代の学習者に対する言語教育の相違点や共通点が、カリキュラム、指導法、教材作成などの側面から話題提供された。招待講演者に Rod Ellis, Paul Nation ら 12 名が名を連ね、活発な議論が繰り広げられた。参加者は東南アジア諸国をはじめ、オセアニア、東アジアなど、計 22 か国から集まった。

この大会の特徴は、“seminar”であるというところに集約されるであろう。学術的な話題を論じる場ではなく、日々の実践に役立つ知見を得る場という姿勢が根底にあり、参加者はそれを強く望み、主催者もそのために企画を練っているようであった。それが最も顕著に表れる例として、招待講演者がワークショップも行うということが挙げられる。講演で理論的な話をするだけでなく、その理論をいかに実践に生かすことができるかを、ワークショップを通じて具体的に伝えるという企画がなされていた。いくつかのワークショップに参加したが、講演者が参加者を巻き込んで、意見や経験談を引き出しながら理論を実践する方法について話を進めていく様は見事であった。また、参加者が積極的に質問したり議論したり、熱心にメモを取る姿を見て、日本における集まりとは違う熱気を感じた。

私は研究上の専門とする動機づけに関係する発表を中心に聴いたが、動機づけ関連の発表にはいつも多くの聴衆が集まり、満員で入れないということもあった。それだけ動機づけは関心の高いテーマであり、動機づけを高めるにはどうしたらよいのかという悩みは、どこの国にも共通するもののようである。ただ、動機づけを高めることを困難にしている要因は国により異なるということも言える。そのように異なる背景を持つ参加者が議論することで、新しい視点が生まれることを期待し議論を楽しんでいる参加者の姿が印象的であった。

私も発表する時間をいただき、日本人英語学習者の動機づけを高める手段としての協同学習の効果というテーマで話題提供した。日本の学校における指導の難しさが、EFL 環境ゆえに学習者の英語を学ぶ動機が弱いこと、クラスサイズが大きいこと、教科書が指定され授業内容が自由に変更できないことの 3 点に表れるが、協同学習を応用することでそれらを克服し、学習者が積極的に学習する場を作ることができることを、実例をもとに紹介した。参加者からの反応で非常に印象深かったのは、日本における困難点として挙げたものが、自分の国でも同じであるという声が複数の国からの参加者から寄せられたことであった。

大会の最後には招待講演者らによるパネルディスカッションと、参加者からの質問に答える“Your Questions Answered”というセッションが行われた。大会を締めくくるにあた

り招待講演者から参加者へメッセージが送られたのだが、常に自分を高める姿勢を持って学び続けてくださいという意味で、大会テーマに即して“**Stay young.**”というメッセージが送られると、参加者の多くが頷いていた。この3日間、参加者の熱気にこちらも負けてはいられないと、いつもと違う熱を発しようとしている自分がいた。このような刺激的な場に立たせてもらえたことを、RELCならびにJACETに感謝申し上げたい。